―青春小説―

自らを越えて（七）

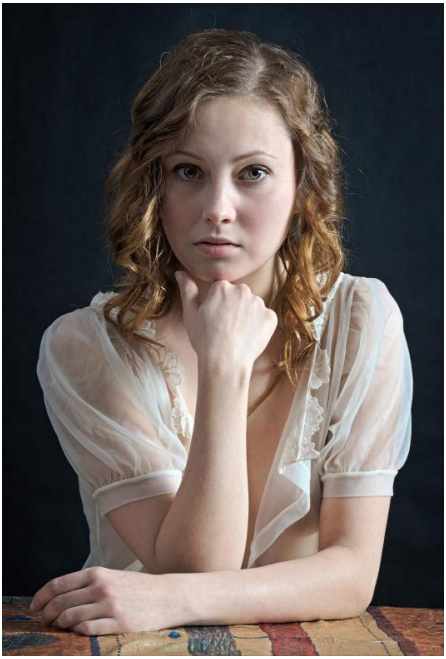
多谷 昇太

そのあからさまな笑いに俺はすっかりパニくってしまい連れの２人や大伴さんへ交互に目を遣るばかりだ。しかしそれを見咎めた大伴さんが２人に振り向いて注意をする。「ちょっとお、カナとミカ、失礼でしょう？大きな声で笑ったりして」と嗜めてから「ごめんなさいね、村田君。この子たちは私の近所に住んでる子たちで、私の幼馴染なの。呼び名はカナとミカ。（２人へ）はい、カナとミカ、村田君に自己紹介して。こちらは私が出た高校の後輩で村田君って云うの。あなたがたより一つ年上よ」と促した。２人は互いに目を見合わせたあとシュラッグする風にしてから「カナ、北田加奈子です」と一人が云い今一人が「ミカでーす。吉井美香」と述べた。俺はぎこちない笑顔を浮かべながら「ど、どうも。村田です」とだけ返す。なぜ大伴さんが俺の名を知っているのかまた「お久しぶりでした」とは何からのことを云うのか質したかったが、前記来縷々記したように俺とは〝異種人種〟たる、健康で陽気な人達の邪魔など絶対にしたくなかったし（まして女性たちならなおさら）、大伴さんと一度でも口が利けたことだけで大いに満足して、その幸福のままに一刻も早くこの場を立ち去りたかったのだ。しかし成り行き上去りも去りならず大伴さんの采配に任す他なかった。その大伴さんが「村田君、そのいでたちはひょっとして登山？どこに行くの？」と訊いて来る。俺は、まさか、まさか、私たちも登山で丹沢に行くなどと云いはすまいなと危惧しながらも「はい、丹沢です」とやってしまう。すると大当たりだった。「ああ、そう。丹沢。それだったら私たちもこれから行くところよ。どう？村田君、ご一緒しない？（カナとミカにふり向いて）いいでしょ？あんたたちも。男子がいた方が楽しいでしょ？」とそれぞれの意向も訊かないで一方的に大伴さんが決め込む。カナとミカは当惑したように顔を見合わせながらも中途半端に頷いて諾を告げた。あとは俺だ。内心では『ああ、どうしよ、どうしよ』と女のように、且つ晴天の霹靂のごとき大当たりの連続に混乱しまくっている。まさか、大伴さんと、マドンナとこれから一日を共に過ごせる…などとは年末ジャンボ大当たりの展開だ。肯んじ得るだろうか？俺の（？）心が。未だ自覚出来ないでいたが〝俺なら

ぬ〟内心の黒い霧が吠えまくる。『まったく馬鹿云ってんじゃないよ！根暗で誰をも不快にさせてしまう〟俺が〟そんなことをしてもいいのか？いいか、大伴さんだぜ？マドンナだぜ？これからの道中幾許もなく飽きられて嫌味を云われるかもな。村田君、いなくなってくれる？とかな。はははは。目に見えてるぜ。ああ、いいさ、いいさ。ほら云えよ、同行しますってな。ほら、どうした？…』「村田君！」いきなり大伴さんが俺の名を強く呼んだ。うつむいて必死に自問自答していた俺が驚いて顔を上げるとまるで俺の内心の問答を見透かしているような大伴さんの毅然とした顔があった。一、二瞬その厳しい視線を俺に差し込んだあとで大伴さんは表情（かお）を和らげ「何も悩むことないじゃない。ふふふ。私たち咬みつきゃあしないわよ。それともあれ？女こわい？」と今度は首を斜めにして下から俺をのぞき込むようにして訊く。その突っ込みに思わず破願し緊張が解けたがしかし長年にわたる根暗のカルマがなおも足を引く。先に黒い霧が述べたような、俺にとってのあらゆる恐怖のパターンがオンパレード状に脳裡に流れ込む。しかしそれを押しのけて胸の奥底から『いいから飛び込んじまえ！彼女を信じろ！』という何者か別格の度量を持つ存在が諾を迫るようだ。何者なのか？とにかくそれに気圧されて生唾をひとつ飲み込み『よし！』と決心した刹那「あーあ、うざってえな」「ねーえ。うふふ」というカナとミカの声が耳に飛び込んで来た。その途端かつて花田からまた新河から受けたトラウマがいっぺんでよみがえり、俺の口はうわごとのように次なる言葉をつらねていた。「お、俺は…いや僕はその…実は人と待ち合わせてまして、ば、場所は横浜でして…ですからその、ご、ご一緒できません。すいません」と。それへ「本当？もしいまのカナとミカの戯言（たわごと）が耳に入ったのならそんなもん気にしなくてもいいのよ。「（カナとミカへ）こら。カナとミカ。気に障ることを人に云うんじゃないの」そう一喝してから「ねーえ、ほら大丈夫よ、村田君。私をあなたのお姉さんか何かと思って、ドーンとぶつかってらっしゃい。この先輩に。すべて受け止めてあげるから。ね？」と〟男気〟を丸出しにして尚も大伴さんが俺を誘ってくれる。しかし一度口にしたことを言下に否定すれば嘘つきになるし、また依怙地と云うか偏屈と云うか何と云うべきか、一度こうとしてしまったことに俺は悉皆拘泥しないところがあって、いやそれどころかそれによってもし人が（特に好きな人が）俺に失望を催すとしたら、そこに

一種快感のようなものを覚える奇妙な性癖があったのだ。

【「村田君！」と咎めるような大伴さんのイメージ写真……ちょっと胸元が妖しいのですが、適当なものがなかったのでこれでご勘弁（もし本当にこんな格好だったら村田君が嬉しがると思いますが）】



フロイトの神経症論研究に好餌を具すような性癖だったが、思うにこれは長年の孤独遍歴から生じたところの、他人に自分をインプットする上での哀しくも自虐的な習い性、あるいは既に快感（…？いや、敢て命名すれば哀感）原則とさえなっていた節がある。まあとにかく、要はマルドロールであったということだ。

「い、いえ、その…横浜駅で友だちが待っているんで（嘘、友人など一人もいない！）…やっぱり駄目なんです。せ、せっかく誘ってもらったのに、す、すいません！」そう云い切ったところで左側から坂を上って来る綱島行きのバスが見えた。「あ、バスが…」と一言言い残し大伴さんに一礼したあと俺はバスの直前に近いタイミングで道を横切り向こう側のバス停に走って行った。

「あぶねー、あいつ」「まったくイヤな野郎！」ミカとカナがそれぞれ餞別の言葉を送ってよこした。大伴さんの最後の表情は確認出来なかったままに俺はバスの車掌から注意されながらも車上の人となった。窓から彼女たちの姿など見れるものではない、俺の胸の中を〝哀感原則〟のままに涙の雨が濡らしていた。このような自分の情けない性癖を嘆いてのことか、あるいは始めて知ったマドンナ大伴朗子の温かさと厚い情のさまを思ってのことか、それはわからなかったが…。

［※１９７０年頃のバスはまだツーマンで運転手と（女性）車掌がいたのです］

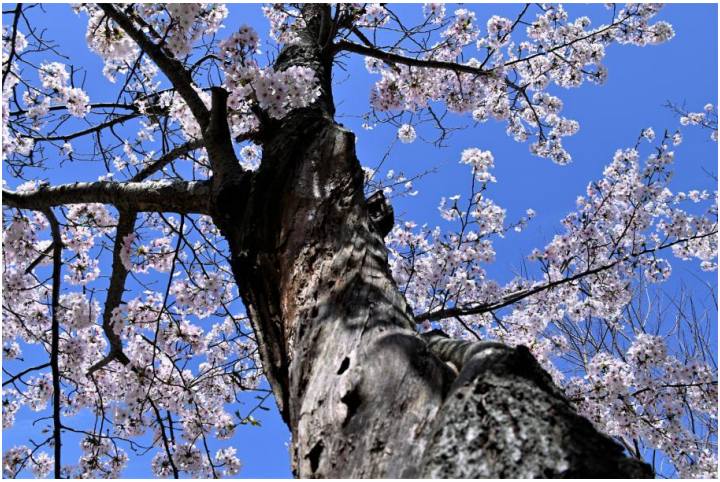
【大伴さんの誘いに応えられず（胸の中で）泣いている村田君のイメージ】

（六）丹沢行

１９６８年９月２２日朝８時過ぎ小田急線秦野駅から神奈中バスに乗り菩提というバス停で降りる。そこから北へ向かって２キロほど行った葛葉沢出合いまで歩いて行く。途中バス停からいくらも行かない街角に樹齢何百年という老桜があって、俺はそこを通る度に木の幹に手を当てて僅かなもの思いにふける。『俺はまだたったの１７年しか生きていないが何百才というあんたの目からすればどうだい？人の世はひどくめまぐるしく映るかね？あんたの樹下を丁髷を結った侍や農民たち、あるいは丸髷を結った女たちがそれぞれの悩みを抱えて通ったことだろうな。堂々たる、老いたる大木よ、俺もそのうちの一人さ。あんたの下を通った数多の衆生の一人だよ。そんなちんけな存在のくせにそしてあんたからすればひよっこにもならないガキのくせに、身に支え切れないほどの生き行く悩みをすでにいっぱい持っているんだ。ふふふ、笑止だろう？俺はいつでも自分、自分、自分で、自分の桎梏からついぞ逃れられない。しかしそれでいながら自分というものがまるで分かっていないんだ。今日はひとつあんたやこの先の丹沢の山々に教えと開運を乞いに来た次第さ』などと漠々濛々（もうもうばくばく）な語り掛けをして立ち去ろうとした。しかしその一瞬離そうとした木の幹からオーラと云うか木の精と云うか、一種パワーのようなものの伝播を感じたのは錯覚だったろうか。またそれはこの先に広がる丹沢の峰々からも同様なものが伝わって来るようだ。あたかも俺に『委細

心得たり』とでも云ってくれてるような塩梅である。どうもこの今日という日は〝何か〟が違う、〝何か〟が待っているような…？

ここから北へ１キロほど行ったところ、住宅街が尽きて大秦野カントリークラブの芝生が現れる辺りに定源寺というお寺がある。その門前に５０センチ四方の黒板が翳されていて、そこに（おそらく）毎日寺の住職がひとつの教えを書いてくれているのだった。今日のそれは「栓抜きのような人間になれ。普段まったく見向きもされないが、居なければ人々が困るような、そんな、栓抜きのような人間に」とあった。毎回身に染みる教えなのだが今日のそれは特にそうだった。もしこのような人であったならその人には〝自分〟など悉皆あるまいな。おそらくすべてが他人指向の、利他の、仏か菩薩のような人…なれるかな？はたして。そんな人に。（続く）



【開運の？老桜…イメージ写真】